

## 活動報告

パーマカルチャー・レクチャー&amp;ワークショップ

## 「七夕バンブープロジェクト」

日時：レクチャー : 2018年7月5日(木) 5限(16:10 - 17:40) 愛知県立大学S棟101  
 ワークショップ : 2018年7月7日(土)、8日(日) 10:00 - 16:00 愛知県立芸術大学長鶴池

## 概要：

愛知県立芸術大学の竹林の間伐材を用いて、自然建築物を作りました。今回作ったのは環境にやさしいエコトイレです。人間の排泄物は土に還せば有機物が分解して堆肥になります。その堆肥を用いて果樹などを育てると、完全に無駄がない、自然循環型のシステムが構築されます。芸大内の長鶴池にエコトイレ(コンポストトイレ)を作ってみました。竹は定期的の間伐しないと竹林が荒れます。間伐した竹で、堆肥用のエコトイレや建築物を作り、観察・実践型の環境教育を、県立大と芸大の合同授業とワークショップで行いました。※本プロジェクトは愛知県立大学の「研究演習(ラテンアメリカ文化・思想)」(谷口智子)と愛知県立芸術大学の大学院美術特別研究「環境とメディア」の合同レクチャーと合同ワークショップ。どちらも学生向けですが、ワークショップに関しては一般参加も歓迎でした(無料)。レクチャーは40名を超え、ワークショップは二日間で一般参加者も含め、延べ70名を超えるほど、盛況でした

## 目的：

1. パーマカルチャー・デザインの講義を英語で聞き、欧米の最新のパーマカルチャー・デザインの理論と日本の伝統的な知恵やスキルを合わせ、創造的な作品を創ること(通訳補助あり)。
2. コンポストトイレを作り、堆肥を果樹などに利用することにより自然循環型の環境意識を育むこと。
3. 芸大内の竹の間伐し、自然建築物を作ることで、竹を活用する技法や伝統的な知恵を学ぶこと。

## 講師：ピーター・ランディーン

コロラド大学ボルダー校人文科学部文化人類学科卒業。ワシントン州のブロックス・パーマカルチャー・ホームステッドなどで研鑽を積む。現在シアトルを中心に、パーマカルチャー・デザイナー、ランドスケーパー、コンサルタントとして活躍中。グリーンゲージデザイン主宰。



担当：愛知県立大学准教授 谷口 智子 / 愛知県立芸術大学教授 石井 晴雄

共催：愛知県立大学多文化共生研究所

## I Permaculture and Humanure Systems: Alternative views on Human relationships

Peter Lundeen

For as long as we have been human, we have been shaping the ecological landscape of the earth. This has always been a dynamic relationship, one where all living and non-living elements existed in a mutually creative and destructive process. Balance was maintained by a deep understanding of natural processes. Nature has a language that humans have intimately understood with respect and honor.

At the dawn of civilization and agriculture, we began to lose touch with this view of Nature. New ideas,

written language and technology have evolved with increasing complexity to the point where, some say, humans are the defining ecological force on the planet. We are changing the ecological systems that support life on earth, and their is no going back.

Permaculture is a response to the global ecological destruction we have seen in the 21st century. Bringing forth the wisdom of traditional nature-based cultures and new perspectives on ecological systems a new paradigm has been opened. One in which humans are part of a complex network, not the dominating overlords. Working with nature rather than against nature is a choice. The principles of Permaculture give us the tools to that help regenerate the earth.

Taking nature as our guide, we see that "waste" is simply

non-existent. There are only cycles. Growth and decay. When a tree dies in the forest in supports more life than it did as a tree. Grazing animals all over the world maintain the fertility of grasslands, their manure being a critical element. So it is with humans, human manure can be poison or a source of life. Its how we choose to interact with it. Humanure systems offer a positive alternative to industrial waste streams. Presevering resources and recycling nutrients. All while keeping them close to the source of life.

## I パーマカルチャーとヒューマヌア（人糞）システム：人類の関係に関する代替的見解

ピーター・ランディーン（谷口 智子訳）

人間である限り、私たちは地球の生態学的景観を形作ってきました。これは、常に有機物と無機物の要素が相互に創造的で破壊的なプロセスで存在していたダイナミックな関係でした。バランスは、自然のプロセスを深く理解することで保たれてきました。自然には、人間が敬意をもって内的に理解してきた言語があります。

農業が起り、文明化が始まると、私たちはこの自然観を失い始めました。新しいアイデア、文章や技術が進化し、人間はいつのまにか地球上の生態学的な力を定義するところまで複雑化してきています。私たちは、地球上の生命を支える生態系を変えており、彼らはもう二度と戻ってこないのです。

パーマカルチャーは、21世紀の私たちが、地球規模の生態系を破壊してきたことへの一つの反応です。自然に根差した伝統的な文化の知恵と、生態系に関する新しい視点をもたらし、開かれた新しいパラダイムなのです。その一つが、人間が生態系の複雑なネットワークの一部であり、その主人ではないということです。自然に相対し、戦うのではなく、自然と対話するという選択肢です。パーマカルチャーの原則は、地球を再生する助けとなるツールを私たちに提示します。

自然をガイドにすると、単なる「廃棄物」は存在しないことが分かります。彼らにはサイクルがあるだけです。成長と崩壊というサイクル。森林の中で樹木が死ぬと、樹木よりも多くの生命が支えられます。世界各地の放牧動物の糞は草地の肥沃度を維持しており、その糞は肥料として重要です。それは人間についても同じで、人糞は毒にも生命の源にもなります。私たちがそれをどう扱うかにかかっているのです。人糞システム（ヒューマヌア・システム）は、産業廃棄物のように水に流され捨てられている現在の人糞使用の代替案を提供します。資源を守り、循環栄養分を維持していくこと。これらをすべて保つことで、生命の源泉に近づくのです。

## II Report on Permaculture Lecture and Workshop

## In Aichi Prefectural University and Aichi Prefectural University of Arts, July 5-8, 2018

Peter Lundeen

One of the most inspiring things I see in the world is when people take small steps towards rediscovering a relationship with land. Whether you come from one of the largest urban cities or the rural countryside, our lives have largely been severed from a connection with place in the way our ancestors experienced it. The transformation that was set in motion through agriculture and civilization and the eventually the conquest and colonization of the last several centuries has left much of the world in a state of dissonance and disrepair. We come from a deep evolution of hunter-gatherers and wild-tenders whom didn't distinguish their existence from that of the land they lived on. For modern people, nature has become the other, a place outside of our understanding and intimacy.

In feeling the loss of our evolutionary inheritance, it becomes clear that, although, much has been lost in the way of culture and the land that supported it, our connection to that past is very much alive in our own nature. I have seen what can happen when a family unites in the decision to return to a nature-based lifestyle, with the intention to understand the patterns and cycles of nature. Without giving up the world in which we have come to dwell. This ability to synthesize ideas, world views, technologies is what gives human such a wonderful capacity for culture and creativity.

For me, the opportunity to cultivate food has lead towards a lifestyle of cultivation. In observing nature, we see that there are many roles and relationships. We can even look to the role of certain organisms for inspiration. Fungi are key in many of the cycles that sustain healthy ecosystems. They move through the world and tend spaces that benefit plants and animals, completing the cycle of growth and decay, which allows for the continuity of life. We can rediscover our right relationships by listening to the stories of traditional cultures, and exploring our own sense of relationship. To the world around us and the world that lies within us.

We live in a time where our opportunity to explore the stories of the past and the future are coming together. If we can bring ourselves to look beyond the technology of screens and social media, directly into the realm where our capacity as humans relates to the opportunities of the world, we might find that place where we don't feel like a stranger in a strange land. Where the air we breather is the same air that the forest breathes, the cycles of our lives are reflections of the broader movements of the world. We



find that our appetite, like a compass, will guide us towards balance and harmony.

## II パーマカルチャー講演会・ワークショップ開催報告 愛知県立大学および愛知県立芸術大学にて、2018年7月 5日～8日

ピーター・ランディーン (谷口 智子訳)

私が世界で見る最も感動的なことの一つは、人々が土地との関係を再発見するために小さな一歩を踏み出すときです。あなたの出身地が、大都市であれ田舎であれ、私たちの祖先たちが経験してきたように、私たちの生活は場所とのつながりから切り離されてきました。農業と文明、そして最終的には過去数世紀の征服と植民地化によって動機づけられたこの変革は、世界の大部分を不協和と荒廃の状態にしました。私たちは、狩猟採集民や野生の思考を持つ者たち、つまり、自らの存在と土地を切り離さなかった者たちの深い進化の末裔です。現代人にとって、自然はもう一方の世界、つまり、私たちの理解と親密さの外側にあります。私たちの進化的遺産の喪失の結果、それを支えてきた土地で多くの伝統文化が失われてきましたが、その過去とのつながりは、私たち自身の性質上、今でも非常に生きています。私は、ある家族が、私たちが住むようになった世界をあきらめることなく、自然のパターンとサイクルを理解することを意図して、自然を基盤としたライフスタイルに戻るといふ決断をし、団結したときに、何が起こり得るのかを見てきました(※アメリカ合衆国ワシントン州オカス島にあるブックス・パーマカルチャー・ホームステッドのこと。三兄弟が家族とともに35年以上前に始めた自給自足的暮らし。今は北米西海岸の成功したパーマカルチャー農場の代表的な一つになっており、毎年パーマカルチャー・デザイン・コースを行い、数多くのデザイナーを輩出している。ピーター・ランディーンも2015-16年の2年間を、そこで住み込みの研修生として学んだ。)アイデア、世界観、技術を総合するこの能力は、人間に文化と創造性のための非常に素晴らしい能力を与えてくれるのです。

私にとって、食物を栽培する機会は、農耕のライフスタイルにつながっています。自然を観察する上で、私たちは多くの役割と関係があることを理解しています。私たちはインスピレーションを得るために特定の有機体の役割を見ることさえできます。真菌は、健康的な生態系を維持する多くのサイクルにおいて重要です。それらは世界を移動し、植物や動物に利益をもたらす空間を形成し、成長と崩壊のサイクルを完成させ、それによって生命の継続を可能にします。私たちは、伝統文化の物語を聞き、私たち自身の人間関係の感覚をその中に探ることによって、私たちの周りの世界と私たちの中にある世界に向かって、私たちの正しい人間関係を再発見することができます。

私たちは過去と未来の物語を探求する機会が共にある現代社会に生きています。私たちがスクリーンやソーシャルメディアの技術を超えて、人間としての私たちの能力が世界にチャンスを与える領域に直接目を向けることができるならば、私たちは見知らぬ土地に降り立った異邦人のように、世界をもう一方にある外部のものと感じないかもしれません。私たちが呼吸する空気が、森が呼吸するのと同じ空気であるならば、私たちの生活のサイクルは、世界のより大きな動きの中の反響になるのです。私たちは自身の食欲が、コンパスのように、バランスと調和に向かって私たちを導いてくれることに気づいています。

※この講義は、2018年7月5日に愛知県立大学長久手キャンパスにて行われました。7月7, 8日には、愛知県立芸術大学構内の長鶴池にて、構内の竹を切り出してコンポストトイレ小屋を作るパーマカルチャー・ワークショップが行われました。愛知県立大学外国語学部准教授の谷口智子と、愛知県立芸術大学の石井晴雄教授のゼミ生約40名が参加し、さらに一般参加者も含め、二日間で延べ70名の参加者が一緒にコンポストトイレ小屋を作りました。もうすぐ卒業する谷口ゼミの学生たちに、「今年一年間で最も心に残った思い出は何か?」と聞くと、「みんなと一緒にコンポストトイレを作ったこと。環境配慮へと意識が変わり、一緒に共同作業することはとても楽しかった」という声があがりました。(文責・谷口智子)

